

視線に関する不快感情に及ぼすポジティブおよびネガティブな特性

○山内裕斗・田邊敏明

(山口大学 教育学部)

問題

視線には、親和欲求、脅威刺激、情報収集などの多くの機能がある。その中で、他者の視線に関して不安や恐怖、イライラなどの不快感情を抱くときもある。だがそれは、それだけ他者や周りを見ていると捉えることもできるだろう。周りに視線を向けるという行為には、周りに対する好奇心、親和性、感受性などのポジティブな面が関与していることが予想される。一方で、周りを見るという行為の中には、疑いや不信、見られるのであれば出来がよい自分を見せたいという完全主義的な認知などのネガティブな面でも解釈できる。つまり、周りに視線を向けるという行為には、ポジティブな面とネガティブな面があり、どちらの傾向が強いのか、ということは人によって程度が異なると考えられる。

そこで本研究では、他者の視線に関する不快感情に及ぼす、ポジティブとネガティブの特性、及び性格特性の影響力の差を調べることを目的とする。

方法

Y 大学の講義の時間内で、大学生を対象に質問紙調査を行った。調査協力者 140 名のうち、すべての項目に回答している者 133 名（男性 74 名、女性 59 名、平均年齢 19 歳）を分析の対象とした。尺度として、視線に関する不快感情尺度（山内・小野，2018）、知的好奇心尺度（西川・雨宮，2015）、大学生における日常生活スキル尺度（島本・石井，2006）、日本語版疑い深さの特性を測定するための尺度（滝口，2017）、完全主義の認知を多次元で測定する尺度（小堀・丹野，2004）、日本語版 TIPI-J（小塩ら，2012）を用いた。

結果と考察

分析ソフト R を使用し、目的変数に視線に関する不快感情尺度の「不安・恐怖」、「イライラ」を設定して重回帰分析を行った（Table1, Table2）。他者の視線で不安や恐怖を感じる人は、自身に課す基準や目標は低く、ミスや失敗に対しての意識が高いという結果になった。自分の能力を自覚したうえで、ミスや失敗をしたくないから基準や目標を低く設定して成功できるようにする、という見方

もできれば、基準や目標を低く設定するがゆえに、“成功するのは当たり前”という考えがよぎり、成功しなかったら恥ずかしい、など周りの評価を気にしてしまうことも考えられる。併せて、親和性とも負の影響が見られたことから、他者からの評価を気にし、自己開示ができないという状況にあることが考えられる。また、外向性とは負、神経症傾向とは正の影響が見られ、「不安・恐怖」因子は対人恐怖と関連するものとして支持できる。

一方で、イライラについては協調性の低さが大きな要因として見られた。いらいらは自分の思い通りにならないときに発生するため、協調性が低く、自分本位で考えてしまう人は、イライラが生じやすいということが考えられる。また、有意差は出なかったものの、ポジティブ面で想定していたものとして、「イライラ」に対する感受性での影響は高い値が得られた。

Table1 重回帰分析の結果

	不安・恐怖	イライラ
拡散的好奇心	0.05	0.1
特殊的好奇心	-0.03	-0.05
信頼への態度	0.18	-0.06
他者一般の不信に関する信念	0.04	-0.08
親和性	-0.6**	-0.33
感受性	0.27	0.4
高目標設置	-0.65***	-0.05
完全性追求	-0.03	0.12
ミスへのとらわれ	0.63***	0.31
R^2	0.297	0.088
$adj R^2$	0.246	0.022
F値	5.778	1.325

** $p < 0.005$ *** $p < 0.001$

Table2 重回帰分析の結果

	不安・恐怖	イライラ
外向性	-0.35**	-0.07
協調性	-0.28	-0.39**
勤勉性	-0.12	-0.12
神経症傾向	0.55***	0.25
開放性	0.14	0.19
R^2	0.257	0.111
$adj R^2$	0.228	0.076
F値	8.776	3.174

** $p < 0.005$ *** $p < 0.001$